十返舎一九の手紙（紹介）

中山尚夫

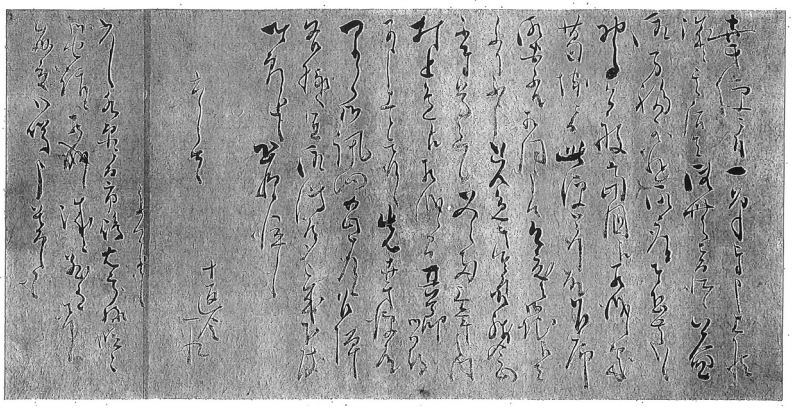
十返舎一九の自筆書簡については、新聞紙上等に取り上げられたことが何度かある。本稿においても一九の手紙を紹介して、この手紙について、その宛先やいつのものかを検証しようと思う。

当該の手紙は、複写の通りであり、筆跡や内容から一九自身の手になるものと断定できる。手紙の持ち主は現在東京都内に在住する会社員の方で、いわゆる国文学（特に近世文学）の研究者ではない。

筆者はその方から本手紙の全文・内容・解説とを本誌に掲載する許可を得たことを初めにお断りする。

○

左が手紙の複写である。手紙の装丁に若干の疑念がないではないが（尚々書の直前の数文字）これに従うしかない。文字は比較的読みやすく感じられた。一九の自筆であることは疑いがない。



次に手紙文を全文翻字する。

幸便ニ付一筆奉申上候。
誠にニ其后者御無音仕候。益
御万福披遊御座候。奉恐慶候。
野子今般当国江罷越候處
葛塚ニ而此便御座候故、乍序
御安否相伺申候。今度者御地江は
参り不申候。差急キ候ニ付乍残念
不奉尊意候。又々両三年之内
村上邊江罷越候間、其節御尋
可申上と披存候。先幸便御座候。
早々御訊問如此御座候。乍憚
各様へ宣御傳聲披成下度
奉願上候。恐惶謹言

六月七日　　十返舎一九

尚々水原ニ而市嶋右二郎様段々
御世話ニ罷成候。誠ニ難有御座候。
毎度御噂申暮候。已上。

書き下しは、
幸便につき一筆申し上げ奉り候。
誠に其の后御無音つかまつり候。益々
御万福に遊ばされ御座候。恐慶奉り候。
野子今般当国へまかりこし候処、
葛塚にてこの便御座候故、ついでながら
御安否相伺い申し候。この度は御地へは
参り申さず候。差し急ぎ候に付き、残念乍
尊意たてまつらず候。又また両三年のうちに
村上あたりへ罷越し候間、その御尋ね
申し上ぐべきと存ぜられ候。まず幸便御座候。
早々にご訊問かくのごとく御座候。憚りながら
各様へ宜しくご傳聲になられ下されたく
願い上げ奉り候。恐惶謹言。

六月七日　　十返舎一九

尚々水原にて市嶋右二郎様段々
お世話に罷り成り候。誠に有難く御座候。
毎度お噂申し暮らし候。　已上。

解釈としては、
幸便（好都合の便り。よいついで。）につき一筆お送りいたします。
本当にその後ご無沙汰いたしました。益々
お幸せにお過ごしでございましょう。お慶び申し上げます。
私はこのたび、この越後国へ来ましたので、
葛塚でこの手紙を書いております。そこでついでですが
（あなた様の）御安否をお伺い申し上げます。今回はそちらへは
行かれません。急いでおりますので、残念ながら
ご尊意に沿うことができません。また二・三年のうちに

村上あたりに参りますので、その折にお尋ね
申し上げようと思われます。まずはお便りをいたします。
早々の御訊問ですが、このような次第です。申し訳あり
ませんが、
皆様へよろしくお伝え下されたく
お願い申しあげます。恐惶謹言。

六月七日　　十返舎一九

なお、水原では市嶋右二郎様にいろいろ
お世話になりました。誠に有難いことでございます。
いつもお噂をして日々を送っております。以上。

ということになろうか。

さて文中に出る地名は「当国」「葛塚」「村上」「水原（スイバラと読むらしい）」である。（厳密には「当国」は地名ではないが）「当国」が国名であり、「越後国」であることは間違いない。それは手紙の内容や他の氏名からわかる。「葛塚」は現在新潟市に属し、「水原」は新潟県阿賀野市に属している。したがって「村上」が新潟県村上市といえよう。つまりこの手紙は、一九が現在の新潟県、当時の越後国へ行った時に書かれたものである。宛先・宛名は不明であるが、葛塚で書いたものである。現在の村上市かその近辺に住む人物に宛てたものと推察する。

手紙の内容は、かつて世話になった人に宛てたもので、その後の無沙汰を詫び、その人物の多幸を喜ぶという形から始まる。自分（一九）が今般また越後国壁へ来、今葛塚に滞在しているが、そこでこの手紙を書いて宛先人の安否を尋ねている。また今回の旅は忙しいので宛先人の居住地へは行けず、宛先人とお話しすることができない。しかしまた二・三年の内には村上近辺に行くことがあるので、その節にお尋ねしようと思っている。まずお手紙でその旨を申し上げる。というもので、皆様方へ宜しく伝えていただきたくお願い申し上げる。というもので、挨拶状の一種といえよう。尚々書（追伸）があり、水原では市嶋右二郎様に様々お世話になった。誠に

有難く、日ごろからいつも市嶋様のお噂をしている。というものである。

十返舎一九が越後国へ行ったのは確実なところその生涯に二度ある（彼の著作による）。すなわち、

① 文化十一年（一八一四）五十歳

七月から十月にかけて、信州・越後・会津遊歴の旅（門弟花垣同道）。

去秋越後行脚の紀行を其のまゝ金草鞋となして此春の新版とす（『金草鞋』八編緒言、文化三年刊）。

予去秋七月東都をたちて信州善光寺に詣たりし序越後高田に出それより柏崎出雲新発田を経て会津に出帰国せしにより（『金草鞋』八編口上、同前刊）。

此草子のさくしや去年此ちへゆうれきしたりしにに ゐがたへいたりしは十月みそかのことなりけり（『金草鞋』八編「新潟」項本文、同前刊）。

② 文化十五年（文政元年、一八一八）五十四歳

四月十六日に江戸出立、越後・信州・上州への旅。八月十日過ぎに江戸帰着。

越後塩沢在住の友人、鈴木牧之を訪ねることが目的で、それに合わせて、三国遊歴を実行した。旅の模様は文政三年（一八二〇）刊の『滑稽旅烏』初編に詳しい。以下それより、越後国に関する箇所を述べる。

四月二十六日塩沢の牧之宅を訪れ、三日間滞留。この間山中にて熊狩りを体験、山中に一泊、清水村の庄屋安部孫左衛門宅に一泊。以後の行程六日町（今中捨太郎を訪問）・浦佐・小千谷（西脇吉郎右衛門を訪問、一泊）・長崎（渡里町の旅籠屋与三兵衛方に宿泊）・与板（国上寺に滞留）・曽根村・内野村・鎧潟・新潟（宿泊、『滑稽旅烏』中の記述参照）・水原（町はずれの青楼亀屋に遊ぶ）・大安寺村（塚口氏を訪問、滞留）・五番町（ここから新津への間に泉水（石油）に出会う）・新津・三条・地蔵堂（杵屋に一泊）・出雲崎（山崎氏宅に滞留）・柏崎（旅籠屋永井又兵衛方に滞留）・米山・高田（以下略）。

の二度である。この手紙にはこの手紙を書いているのが葛塚とある。葛塚は水原と新潟の間に位置する。尚々書によれば

葛塚の手前の水原では市嶋右二郎の世話になった旨が記されている。①の記述は必ずしもこの手紙内容とは一致せず、文化十五年の旅の模様の方が一致する。さらに、この越後行きの行程の一部は、水原から葛塚へとなる。つまり、本手紙の執筆は文化五年の旅と推測され、水原青楼亀屋で遊んだものと推測する。そして、一九の越後行きが前記の二回であるならば、一九が以前に世話になった宛先人は文化十一年の旅の折に世話になった人物であろう。

なお、『滑稽旅烏』には水原のはずれの亀屋（と思しきところ）で昼食をもてなされる一九の様子が描かれている。この書には一九をもてなしたと思われる人物の絵が描かれているが、この人物と市嶋右二郎とが同一人物であるか否かは現時点では不明である。さらに本作の中に「このほどの甚暑」とあるが、この記述も日付と一致しており、大変興味深い。

この手紙は特別な要件を記したものではなく、前記の通りご機嫌伺い的な手紙であることがわかる。この手紙からは筆まめで他人との関係にとても気を遣う一九の人物像がみてとれる。よく言われることではあるが、気を遣い、自分のこともさりながら、他人に対する人一倍の気遣いがこの手紙からも窺える。